

第6章 今後の課題と展望

1. チャベス政権の功罪

チャベス大統領が標榜する「ボリバル革命」の肯定的側面を指摘するならば、カウディージョ（統領）主義や恩顧主義といったその「前近代的」側面にもかかわらず、ある意味では民主的役割を担っているということである。つまり、チャベス政権はこれまで政治の対象から疎外され、無視されてきた貧困大衆や先住民等に光を当て、インフォーマル化ないし非制度化の危険がある、あるいはあると認識されていたセクターを取り込むことにより、民主主義の強化に貢献しているといえよう。貧困大衆の目線に立って、彼らと対等に話しかけた史上初めての大統領であり、一般大衆にとっては初めて政治への意識に目覚めさせられたといえる。

しかし同時に、チャベス大統領は「アロー・プレシデンテ」その他の国民向け演説において、たとえば貧困層や下層階級の者すべてが搾取されている善人であり、富裕層、上層階級に属する者はすべて腐敗した悪人であるかのような言辞をしばしば弄し、また目的は手段を正当化するというような趣旨を述べることにより、国民に価値観の倒錯を起こさせるメッセージを日常的に送っている。これが無知な大衆の教育並びに法の支配と制度構築の面においていかにマイナスの効果を生んでいるか測り知れないものがあると思われる。一般大衆をして政治的意識に目覚めさせたことは民主主義の強化に役立つであろうが、彼らの価値観を歪め、かつ政治への期待値を高めたということは、今後は反チャベス派も絶対多数を占めるこの層を無視して政権を目指すことが不可能となり、今後はいずれの候補もポピュリスト的手法をとらざるを得ないという土壤ができてしまったともいえる。

2. チャベス政権の課題

チャベス政権の課題はグッド・ガバナンス^{注35}の確保と、さらには「革命」を真の意味での開発に導き得るかという2点にあらう。先ず前者について見てみたい。

グッド・ガバナンスの構成要素としては主要ドナー国・国際機関の考え方に基づけばおおむね(イ)リベラルな民主主義の定着、(ロ)法の支配の確立、(ハ)市民社会の形成、(ニ)政府の信頼性の向上(政府の政策実行、説明責任・透明性、効率的な公的部門)、(ホ)腐敗汚職の抑制および(ヘ)シビリアンコントロール、の6項目に集約される。

チャベス政権の場合、前章でも見たとおり、民主的に選ばれた政権が次第に強権化しつつある、即ち「非リベラルな民主主義」の色彩を強めつつあるという点が懸念される。

また、一般的にラテンアメリカでは、司法は政治権力の影響を受けやすく、「法の支配」の核心である司法権の独立、特に最高裁の独立性が極めて脆弱であるが、チャベス政権の下では前述のような最高裁判所組織法の改正により最高裁判事の多数がチャベス派で占められることになったためその傾向は一層強まった。本来なら政党がバランサーの役割を担うべきところであるが、二大政党の無力化とチャベス政権の「参加型民主主義」に基づく統治方法が相俟って、政党の力と役割は極めて限られたものと化している。この空白を埋めるため、ベネズエラでは経営者団体である FEDECAMARAS (商工会議所連盟) と最大の労働組合である CTV (ベネズエラ労働者総同盟) が反政府運動の中心的役割を担ってきたが、これも挫折した。市民社会としては、SUMATE、COFAVIC、QUEREMOS ELEGIR 等々数多くの民主主義と人権擁護のための NGO が活動しているが、米国から資金援助を受けている機関は政府から厳しい監視を受けているようである。

^{注35} グッド・ガバナンスに関しては、佐藤秀雄「グッド・ガバナンス論と開発援助の新たな測定評価の模索—「包括的開発測定評価指数＝CADI」の構想と中米二カ国におけるガバナンス分析—」2003 において詳細な分析が行われている。

政府に対する信頼度については、2004 年 12 月に Kissinger-McLarty & Zogby が行った世論調査が参考になる。それによれば、政府が間違った方向に進んでいると考える者が 57%、国が不安定であるとする者が 63%、ベネズエラへの投資が危険であるとする者が 63%に達している。また、チャベス大統領を合法的と見做さない者が 51%、2004 年 8 月 15 日の罷免国民投票でチャベス大統領は不正を行ったと考える者が 53%に上る。と同時に、現在のベネズエラの状況を如実に物語っていると思われるのは、チャベス大統領を是認しないと答えた者が 55%ある一方、反政府の指導者を是認しないと答えた者も 56%に上ったことである。

もっとも、上述のグッド・ガバナンスの構成要素は主要ドナー国・国際機関の考え方に基づくものであるが、チャベス政権は「革命」の推進を至上命題としており、そもそもかかるグッド・ガバナンスの価値観を共有していないのではないかと考えられる。

チャベス政権のもう一つの課題は、「ボリバル革命」が真の意味での開発に繋がるかということであろう。この国の貧困の最たる原因は毎年生み出される 40 万人の新たな労働力を労働市場が吸収できないことにある。従って、貧困撲滅のためには年間 5~6%の実質成長率を 25 年間持続させなければならず、そのためには公共投資依存型では天井が見えているといえよう。「ボリバル革命」が指向する内向きの開発モデルでは十分な成長を確保することは困難であり、従って貧困削減の実現も難しいと思われる。持続的な経済成長を達成するためには、政府は教育と保健を中心とした社会投資に徹しつつ、むしろダイナミックな民間投資誘致と輸出指向の政策こそが不可欠ではないかと思われる。

3. チャベス政権の展望

チャベス政権は04年8月の大統領罷免国民投票を乗り越え、また同年10月末の地方選挙でチャベス派候補者が躍進した^{注36}こともあり、同政権の政治基盤は磐石なものとなった。野党をはじめとする反対勢力は完全に無力化しているため、いまやチャベス政権は独走体制にあるといえよう。野党・反政府勢力側に受け皿がないため、チャベス政権は相当に長期化する可能性がある。国内に敵が存在しない現状において、同政権を揺るがし得る要素としては以下のようなものが考えられよう。

(1) 原油の国際価格

石油部門はベネズエラのGDPの4分の1、輸出の82%、中央政府歳入の半分（いずれも2003年）を占める基幹産業であるが、チャベス政権は、就任以来、国際原油価格の高騰による潤沢な外貨収入および財政収入に恵まれてきた。そしてそれをテコに各種のミシオネス計画等即効的な社会政策を実施し、貧困層の期待と支持を繋ぎとめてきた。国際原油価格は今後も当分の間高値を維持するものとみられるが、万が一なんらかの理由で価格が下落した場合、果たしてどこまで貧困層の離反を食い止め得るか、疑問なしとしない。

(2) 内輪もめ

チャベス大統領は、ベネズエラ人が民主行動党（AD）やキリスト教民主党（COPEI）を連想させるようながっちり組織された政党を嫌うことを十分認識している。そのため、与党 MVR（第五共和国運動）を敢えて強固な党組織にはせず、弱い結びつきに止めている。従ってチェベス大統領の支持基盤は必ずしも安定しているわけではない。MVR の他にも PPT（皆のため

^{注36} 2004年10月31日の地方選挙の結果、22州中20の州知事ポストがチャベス派で占められることとなった（それまで8州が反政府系知事）。また、市長ポストについてはそれまで65%が反政府系で占められていたが、同選挙の結果、政府側が83%（270市）を占めた。もともと、同選挙の棄権率は55%に上った。

の祖国)、Podemos（我々是可以）、PCV（ベネズエラ共産党）等の政党がチャベス大統領を支持しているが、反対勢力が無力化した状況下において、エネルギーが外へ向かわず、内部の権力闘争に向かい、それが激化すると政権の足元を揺さぶる可能性も排除されない。

(3) ボリバル革命の輸出

チャベス政権の外交政策の基本目標は米国の一極支配に抵抗し、これを封じ込めることにある。そのためにキューバその他の反米政権と関係を深めるのみならず、中南米の左翼運動との連携強化を図っている。チャベス政権はコロンビアが米国との間で進めている「プラン・コロンビア」を同地域への米国の介入を許すものとして苦々しく思っており、これに協力する代わりにむしろ同国の反政府ゲリラ組織「コロンビア革命軍（FARC）」に対し宥和的である。国境のベネズエラ側にある彼らの兵站および休息のための野営地を黙認しているのみならず、同組織に対し武器援助を行っている可能性も取りざたされている（チャベス政権が最近ロシアから購入した武器のなかに 10 万挺の AK103 および 104 型銃が含まれており、これは FARC が使用している銃と同型であるといわれる）。また、前述のとおり、ボリビアの反政府左翼指導者エボ・モラレスに対する財政的支援、さらにはエクアドルの先住民運動、エル・サルバドルのファラブンド・マルティ民族解放戦線（FMLN）およびニカラグアのサンディニスタとの関係も噂されている。チャベス大統領はこれらの動きの中で決定的な証拠を露呈するに至っていないが、今後これがある一線を超えるような事態に発展した場合には近隣国および米国等との間で深刻な問題を惹起することもあり得よう。

(4) 腐敗・汚職

チャベス政権が権力を集中してくると、前記（2）の内輪もめとともに、政権内部に腐敗・汚職がはびこる可能性が出てくる。政府関係者の汚職については、一般的には当事者の首を切ることによって凌ぐことは可能であろうが、ペルーのフジモリ政権のような例もあり、かかる事態が政権の命取りとならないという保証はない。